

朱鷺の郷、佐渡で想ったこと

環境省と新潟県が主催する「トキの野生復帰をめざす」シンポジウムから基調講演の依頼があり、佐渡に行った。佐渡を訪れるのは初めてだった。佐渡は、わたしにとって特別な場所だった。わたしがトキに関心を持ったのは中学生の頃。当時はすでにトキが、最後の生息地となった佐渡で10羽以下にまで減り、その危機的状況を報じる当時の新聞を切り抜いては、スクラップブックに張り付けていたのを思い出す。

同じ時期、水俣病やイタイイタイ病など、深刻な公害問題やベトナム戦争に関する記事が毎日のように載っていたので、それらの記事もたくさん切り抜いていた。また、光化学スモッグが発生して校庭での体育の授業が中止になることも度々あった。自転車で友達と遊びに行った代々木公園の周辺では、機動隊と学生がにらみ合っていた。時代は騒然としていた。

毎日通学の途中で渡る横断歩道では、洪水のように流れていく自動車が騒音と排気ガスを撒き散らしていく甲州街道を横目に見ながらいつも思った。こんなこと、いつ迄も続くはずが無いと。みんなで危ない綱渡りをしているように見えた。

何か巨大なものに飲み込まれていくような、不安に怯えていた思春期の自分にとって、絶滅寸前のトキの姿は胸に迫るものがあった。その頃、自分の中に小さく漠然とした決意が浮かんで来た。「もしかしたら、この巨大な力に力で対抗するのではなく、大きな力に頼らずに身の丈に合ったやり方で、まったく別の方法で世の中を変えられるかもしれない。」もしかしたら、「そんな方法が何処かに眠っているかもしれない。自分にも、いつの日かその方法を見つけることができるかもしれない。相手がブルドーザーで崩しても、何度でもこっちはスプーンでも元に戻してやるという覚悟で続けていけば、その内きっと世の中を変える方法を見つけられるはずだ。」

このままでは絶対に嫌だという思いに駆られた子どもの中に浮かんで来た、何の根拠も無いただの直感というよりも、衝動だった。わたしはダンプの振動で小刻みに揺れる横断歩道を渡る毎に、騒音と排気ガスを浴びながら、そのことを何度も繰り返し思い続けていた。

今回初めて佐渡に行って、最後の日本産トキ「キン」に会い、昔新聞やテレビで見たトキ保護に関わってこられた佐藤春雄さんをはじめ多くの島の人たちと親しく話をする事ができた。とくに、佐藤春雄さんは、わたしは中学生当時にトキの保護策をめぐる論争で、トキの捕獲飼育による保護を主張する中央の学者に対して、トキの生息環境を保全再生することが必要だと主張されていたのを、わたしは鮮明に憶えていた。わたしは、権威を持つ中央の学者たちに対して、堂々と本質的な主張をされていた佐藤さんの姿に強く感銘を受けた。

そして、わたしはふと気付いた。その私が、佐渡の人たちの前で講演をしていることに。その場で、私は何か不思議な思いにかられた。小中学生の頃の自分は今も生き続けているという感覚だ。あの中学生は、今ここに居るという感覚。あの時に漠然とやりたいと思った事を、自分が見つけた方法で実現させようとしていると、あの時の子どもが大勢の人々の前で話をしているんだと気が付き、わたしは本当に驚いた。

佐渡に行って子どもの頃の自分が探していたことを確かめながら、子どもの自分がずうっと一緒に生きて来たのだという事実気付く事ができた。これも、朱鷺のお蔭だ。ありがとう。

